

夢入り娘



三色ポンド

夢入り娘



三色ボンド 著

「今回の事件の原因についてはどのように分析されますか、太田さん」

太田さんと呼ばれた老人は長いまつげを揺らして瞬き、入れ歯をぐらつかせて答えた。

「私はね、いつも言っていることなんだけど、こういう事件になるとやれ家庭環境だ、社会不安だ、ということが原因で心を病んで人を殺したなんてお話になるのはね、違うと言っているんです。と言うのはね、ずっと検事局で働いていた私のような人間からするとね、人を殺す精神状態って言うのは異常と言えば異常なんだけど、普通皆そう言う部分は持つてゐるって言うのは常識なの。特にね、今回の事件の様に父親が息子を殺すと言うと家族の単位でものを考えがちだけど、世代が違うものに対する憎しみって言うのもあるし、十把一絡げにして語るのは事件の中身についてちゃんと見ていこうって言う気持ちが無い様には思いませんね」

隣の初老の男性が続ける。

「今太田さんが仰った様に僕も思うんですけど、皆安心したがってそう言うことになっちゃってんだよね。要するに、自分はそう言った事件とは無関係だ、事件が起こるのは特別な要素がそこにあるからだって思いたいっていうのがあつて、特別な部分ばかりを見ようとするんだよ。もちろん人を殺すなんてのは普通しないけどさ、状況が変われば人は変わるからね。そこを認識してないところいう事件はなくならないと思うなあ」

司会は暗い面持ちを明るく変え、スポーツの話を切り出した。

「先生」

耳元の声に驚き目を覚ます。霞がかつた視界は、大屋さんの像を辛うじて結んだ。

「……多分大屋さんおはようございます」

「二時半です。お昼寝が長いですよ。十五分程度で起きないと昼寝のあとの仕事の効率が悪くなるそうです。タイマーをセットしてから寝て下さいね。」

それで、目を覚ましてしっかりと聞いて頂きたい大事な話があつてお休みの所を失礼したんですけれど、宜しいですか。どうしても今じゃないとダメなんですけど」

「はい。うん、なんですか」

「竹藤さんという方から、お電話が入っています」

勿体ぶるより前に、受話器をよこさない。

竹藤は高校時代の友達だ。今では落ち着いたものだが、昔は大変なやんちゃ坊主だった。そんな彼は今、やんちゃな人を捕まえる商売をしている。いや、前言撤回。落ち着いてはいない。受話器を構えると、背景の喧噪が聞こえた。

「もしもし木下です。待たせて悪いね」

「おう、俺だよ、オレオレ。昼寝してるとこ悪いけど、一つ頼まれて欲しいんだ」

「ああ……いいけど、しかし君、僕が昼寝してることをよく分かったな。鋭い。大したもんだ」

「電話に出た女の人が言ってた」

「……そうか」

大屋さんに目をやる。すました顔をして、いたずらつ子め。

「それはいいや。それで頼みごとって？」

「ああ、お前昨日の殺人事件知ってるか？」

無論である。この佐々野市には珍しい殺人事件で、しかも被害者が子供だという、近所で大騒ぎになっている大ニュースだ。犯人は被害者の実の父親で、すぐさま母親の通報で逮捕されたそうだが、取り調べで『神の啓示を受けた』と悪びれもせず言い放ったという。

「知ってるよ。それに関係する話？」

「犯人はもう捕まってるんだけどな、そいつが弁護士を呼んで欲しいっていうからさ」

「それを僕に依頼しようって言うのか？」

「そう言うこと」

「なんで君が僕を推薦するんだよ。候補がいなけりや当番弁護士だろ普通」

「それがなあ、本人のご指名なんだよ」

「え」

本人からの指名か。問題は無いが……

「そう言うことだからさ、俺はただの連絡係」

「分かった。今から行って大丈夫かな？」

「そうだな、一応調書はとり終わってるし、平気だろう。早めに来ないと検察に送致するかもしれないけどな」

「すぐ行くよ」

「頼んだぜ」

適当に挨拶をして、電話を切る。

自分の机で書類を整理していた大屋さんが、聞こえていたのだろう、不安そうに聞いている。
きた。

「何の事件ですか？ 刑事ですよね」

「ああ、ほら、神のお告げで自分の子供を殺しちゃったっていう、アレ」

「え、アレですか」

そう言うのと、眉をしかめて俯いてしまった。無理もない。正直な話関わりたくない部類の事件だと思う。既に被疑者が犯人であることはほぼ確定的だし、恐らく精神が壊れてい

る人物なのだろう。そう言う人と会話するのは、疲れるものだ。

「それで、先生は受けられるおつもりですか？ その依頼」

「多分ね」

僕の返事を聞いて、大屋さんはさらに暗い顔をして、そうですか、と呟く。

「やっぱり、いやかな」

「……そうですね、ちよつと、気乗りしません」

今まで気乗りする仕事もしない仕事もあつたけれど、気分の問題で依頼を断つた事は無い。それが僕らの仕事だ。法というルール以外の基準を、そこで持つて来てはいけないと思つている。

「理由を聞いても良い？」

「……報道を見る限りでは、被疑者は異常な精神状態で犯行に及んでいます。となると、弁護方針は心神喪失か心神耗弱を理由に無罪を主張することになると思っています。……ですよね？ そうすると、世間からの反発があるんじゃないかな、と」

なるほど。手口や動機が異常な事件は大抵の場合、責任能力の有無が争点になる。責任能力がないと判定されればいくら被告が真犯人だと分かっている、無罪になり得る。そのことに対して『それで殺人鬼を何の罰も与えずに、また世間に戻していいのか』という

疑問は今盛んに議論される所だ。確かに言われてみれば大屋さんの言う通り、近所からの評判は悪くなるかも知れない。

ここで、大屋さんの言う通りだ、と言って素直に依頼を断る様なことは、いつもならない。だけど彼女の話を聞き、彼女の不安が僕に伝わると、その不安が僕の中で彼女の話とは別の引っかけかりを見つけ出したようだった。

さつき竹藤は「犯人自身が僕を指名した」と言った。それ自体、手順としては間違っていない。弁護士は本人や家族等の依頼によつて代理人になることが出来る。しかし問題は、その前の段階だ。

その前の段階、つまり犯人が『どこで僕を知つたのか』『なぜ僕を選んだのか』である。自分で言うのもなんだけど、僕は有名な弁護士ではないし、経歴も浅い。地元の人間だから、ということを知つていたとしても、民事ばかり、場合によつては司法書士でも済む様な仕事ぐらいしか扱っていない僕を、この重大な事件の弁護人にあえて指名する理由は何だろう。こんな疑問は、説明しようと思えばいくらでも説明がつくものかもしれない。法に明るくなければ、当番弁護士なんてものがあることも知らなくて、とりあえず知つて名前を挙げてみた、とか。

だけど、殺人犯が、という主語がやはり気になる。殺人犯が僕を指名した。それも、か

なり精神的に危なげな人が。……考えても仕方の無いことではある。理由は、本人に聞くのが一番手っ取り早いのだろう。ただ、少しの怖さは拭えない。

「大屋さんの言う通りかもしれないけど、それで断るっていうのはしない」

「そうですよね」

「とはいえ」

「とはいえ？」

「殺人事件の弁護を全う出来る自信は特にないので、僕に無理そうだったら、断ってくるかもしれないです。依頼人の利益を最優先、つてことだね」

「それじゃあ」

大屋さんの表情が俄に、少しだけど明るくなる。気乗りしないという言い方だったけど、相当嫌なのだろう。さつき説明された理由以上に、心情的に関わりたくないように見えた。

「とりあえずは話を聞いてくるよ。決めるのはそのあとつてことでどうかな」

「はい、じゃあ、上手く断ってきて下さいね」

「いや、だから決めるのは話聞いてからだから」

「冗談ですよ冗談。でも、先生に殺人事件は無理です。いつてらっしゃい」

どういう意味なのか判断を留保せざるを得ない送り出しに苦笑いしながら、大屋さんの

為にも『どうか自分の手に負えない事件であります様に』という思いが自分の中にあることに気づいた。

不誠実だな。よくない。

階段を降りるとツンと花の香りが漂ってくる。うちの事務所は建物の二階にあるのだけど、一階は花屋さんなのだ。お店の人に会釈しながら、僕は原付きにまたがった。

佐々野市は穏やかなところだ。人口がだいたい十三万人。町の七割以上が住宅で、騒々しくもなく、さりとて寂しいわけでもない。人々の不満とさえいって『なかなか踏切が開かない』ぐらいのものだ。天変地異もなく、大地震も洪水も、看板が吹き飛ばす台風も、僕はまだ経験したことがない。僕はここで生まれ、育ち、色々知った後もなおここに法律事務所を構えている。どうもこのまま行くとこの町に骨を埋めそうな気がするが、そのことに對してもむしろ好ましいとさえ思う。いい町だ。

警察署はうちの事務所の目と鼻の先にある、と言いたい所だけど、そう表現するとキリンか馬の顔を持つてこないといけないぐらいの目と鼻の先になってしまう。自転車です十分ぐらいの所にあるので近いと言えば近いのだけど、歩いていくとちょっと面倒という何とも半端な距離だ。帯と襷に短し長し。僕の場合は体力が人並み以下なので、こういう時は原動機付自転車で行かせてもらっている。

「はじめまして、弁護士の木下昇です。えと、お名前は平谷間茂ひらやまさんで宜しいですか」
面会室で迎えたのは、それなりに端正な顔立ちをしている男だった。平谷間茂。今回の事件の犯人だ。

「はじめまして……ふふ、はじめましてかあ。はじめましてついでいやあはじめましてだよなあ。木下さん、正解だ。はじめまして。名前はそれであつてるよ」

顔に似合わない話し方に少し不気味さを覚えたが、特に驚くことでもない。『神の啓示』で人を殺したと供述する様な男なのだから、むしろこれくらいで当然だろう。予想の範疇である。

「まず最初におことわりしておきますが、まだ私はあなたの依頼を受けると決めたわけではありません。とりあえずお話を伺ってから決めさせて下さい。場合によっては、私の手に余る事件かも知れませんが」

「ああ、それでいいよ」

生まれて初めての『断るかも』の前置きをして、ここから本題がはじまる。

「では、事件の話を聞かせて下さい。あなたにかかっている容疑は、殺人です。被害者はあなたの七歳の息子さんですね。この容疑を認めた、と聞きましたが」

「そう、そのとおり。やったのは俺だ。……ふふふふふふ。そんな顔すんなよ、木下さんよ。」

俺はなあ、ついにやったんだよ。自己実現つてやつだな。はははは、自分のあるべき姿にたどり着いたつてわけだ。わかるだろ？ あんたならわかる。自己実現の大切さがさ」

いきなり話題の方向が飛んだ。とりあえず犯行を認めているのは分かったが、自己実現？ それが動機だつていうのだろうか。『神の啓示』はどうしたというのだろう。

「自己実現、ですか。動機は『神の啓示』を受けたから、と聞いているんですが」

「神の啓示、ね。んー、ちよつと違うんだよなあ。確かに神様と言つちやあ神様なんだけどねえ。自己実現つてな、自身の理想型なんだよ。な。世界が持つている秩序の中で自分がどうあるべきか。その役目通りに動くんだ。大抵の奴らは知らん顔して秩序を乱してる。それで、たまに俺みたいに与えられた通りに動いてるヤツを見ると、怖くなるんだな、自分が役目を全うしてないことに」

なんだか、凄く帰りたくなつてきた。いや、言いたいことは概ね理解出来ている。つまり、息子さんを殺した理由は『自分に与えられた使命だったから』ということだろう。誰に与えられたのかと言えば、それは『世界』だという。そしてその世界に与えられた使命を果たすことが『自己実現』なのだ。僕がそう言い換えて確認すると、平谷間はうんうんと満足そうに頷いたが、『世界が使命を与える』という意味がいまいち理解出来ていないと伝えると、少し困った様な顔をして言った。

「え、分かんないかなあ。つまりねえ、例えば、そう、積み木で子供が遊んでるとするだろ。子供なんてのはそれをぐちゃぐちゃ適当に乗っけたり崩したりしてるだけだ。汚らしいもんさ。でもその時間はその積み木はそうなっていて別に良いわけだ」

「はあ、というために似た反応しか出来ない。」

「そこにお母さんがやってきて『ご飯だから片付けなさい』と叱りつけるんだ。そうすると、積み木をおもちや箱にしまわなきゃいけないだろ？」

「ええ、まあ」

「だから、その時は積み木は外に出ていちゃいけない。きちんと箱にしまわれてなきゃいけないんだよ。それが『あるべき姿』『正しい姿』ってやつだ。そのあるべき姿にならなきゃいけない、って言うのが『使命』ってわけだな」

全く僕の理解は進まなかつたが、一つだけこの話を聞いて分かった。この男は説明が下手だ。ここの動機部分については、保留としておこう。永久に。

「わかつてつかなあ？ 木下さあん」

「言いたいことは何となく。それでそのためにあなたがやらなければいけないこと、それが息子さんを殺害するということだったと」

「そこなんだけどねえ、結果的に死んじやつたけどさあ、そこが問題なわけじゃなかった

んだよねえ、へっへ」

「と言いますと？」

「あれ、木下さん、うちの息子の死因は聞いてないの？ ん、実はねえ、殺す殺さないは問題じゃなくてねえ、うん、大事なのはね、心臓を食べることだったんだよねえ」

「は？」

心臓を食べる。心臓。

食べたのか……自分の子供の心臓を。光景を想像して少し気持ち悪くなった。そしてこの段階で僕は一つ決意をした。この男は、もう何でもアリだから、僕とは別の世界のお話だと思つて、とりあえず話をあわせておこう、と。本気で理解しようと思つたら、こつちが参つてしまう。もうどうせ、詳しく話を聞こうが聞くまいが、弁護方針は固まつた。こんな、まともな精神だなんて誰が言える？ 自分の息子を殺して、心臓を取り出して、食べたんだぞ。異常者の塊じゃないか。とにかく今は、話を合わせてやり過ぎそう。

「なあ、木下さん。あんた、夢を覚えてるほうだろ」

「ええ、まあ、夢を見たら覚えてますね。て言つても忘れてたら忘れてることも分からないと思ひますけど」

「その夢つてのが大事なんだよ。夢つてのはさ、無意識の発露だと言われているわけだよ

ね。でも同時に、もう一つの別の世界があるようでもある。な、夢って本当はよくわかenneえよな」

「そうですね、よくわかんないです」

「胡蝶の夢って、あるだろお。夢の中でチヨウチヨだったけど、目が覚めたら人間でした。でもひよつとしたら、今この瞬間が夢なんじゃねえの？　っていう、お話」

「漢文の授業でやりましたね。荘子でしたか」

我ながら上手く話を合わせられていると思う。このまま、面会を終わりたいな、と思った瞬間、平谷間の目が僕を撫で回す様に迫って、言った。

「あんた、今、現実世界に生きていると思うかい。それとも、ひよつとしたら夢を見ているかもって、少しでも思うかい」

不気味に僕を見つめつづける瞳。こいつは何が言いたいんだ。

「どっちでもいいでしょう」

「答えるんだ」

何故か、目を逸らせない。そうか、こいつは仮にも、殺人犯だ。人一人殺してる。殺しをした人間は、そうでない人間に対して優越感を抱けるものなのかもしれない。逆に僕は劣等感を……

あることを『経験している』というただ一事が、こいつと僕の間、生物的な上下関係を作り出している。でもそんなもの、関係無い。そっちが依頼人、こっちが弁護士だ。威圧される様な筋合いじゃない。そろそろ面会時間が終わる。最後に話を戻しておこう。もう、締めだ。

「事件に関係のない話は、よしませう。動機については分かりました。手口についても、全て警察の言う通りだと認めているのなら、詳しく聞いても意味はありませんね。もう少しで面会時間が終わってしまいます。一応、弁護士針についてお話をしておきましょうか」

「……そうかい。いや、俺があんたを呼んだのは、弁護してもらうためじゃあ、ねえんだよな、本当は。俺の言いたいことを、あんたにわかりやすく皆に伝えて欲しいんだよ。あんたなら俺の話の意味が分かるだろうと思っただけだからなあ。なにしろこの辺じゃあんただけが俺の言うことの正当性を認めてくれる。同じだ。あんたと俺で違うのは、言葉の説得力と、表現力だ。あんたなら俺の言いたいことを分かりやすく出来る。俺が直接じゃあ、ほら、また『神の啓示』とか言われちまうんだぜ」

「あんたが言いたいことなんて僕にも分からない。勝手に自分で言ってくれ。」

「弁護士針はおまかせ、ということですね」

「ああ、弁護は何でも良い……が、頼むぜ、木下先生よ。罰を受けるのは法律上しかたね

えんだろが、俺が悪いつてことになつちまうのはいやなんだよ」

もう、よくわからないけど

「わかりました」

と言つておこう。

面会時間はあと一分も無い。ようやく、終わりだ。

「そうだな、じゃあ、頼んだぜ、本当に」

「まだ請け負うかどうかは決められません。明日には結論を出しておきます」

「……ああ、そうか、うん、そうだな」

平谷間の声小さくなつた。もし僕が受けなくても国選弁護人がつくんだから、その人に頼んであんたの言いたいことを通訳してもらえばいい。僕がやろうが誰がやろうが、同じだよ。どうせ、誰もあんたの言うことはわからない。

「じゃ」

時間が来て、平谷間が席を立つ。そこで、僕は一つだけ聞き忘れていることを思い出した。

「すいません、最後に一つだけ。なぜ僕を選んだんです？」

「へ、なんだよ木下さん。事件と関係無い話はしないんじゃないやなかつたのか？」

「気になつたものですか。ダメですか？」

「さつきも言っただろう。あんただけが俺の言いたいことを理解出来るから、だよ」

「どうして僕なら分かると思つたんです？ それに、僕のこととはどこで知つたんですか？」

「質問が多いな……じゃあ、ヒントやるよ。木下さんは、夢の中で空を飛べると思うかい？」

ヒントと称して、質問が帰つてきた。夢の中で空を飛べるか……さつきの夢の話の、続きか？ 聞かなきや良かった。

「考えたこともありません」

そう言うのと、平谷間は少しがつくりして、

「……ま、次は『はじめまして』じゃないと良いけどな、木下さん」

と、ぼそつと言つて、連れられて行つた。

ひどく疲れた。ほんの十何分しか話していないのに随分と体力を使ったようだ。壊れた人を相手にするところというものなのか。勉強になる。

原付でとぼとぼ走る帰り道、僕は悩んでいた。心では『自分の手に負えない』と思いたがつていたが、やはり『言い訳していいいか』という気持ちは拭えなかつた。正直な所、無理をすれば引き受けられる仕事なのだ。依頼人と今後殆ど相談せずにも、弁護は可能。だから、ここで楽を選んでしまうのは負けな気がする。

断れる理由を探してみる。

大屋さんがいやがっていること。

僕自身が依頼人をもの凄く嫌っていること。

未だ解消されない違和感。

どれも、出来る仕事を断る『動機』にはなるけれど、『理由』には出来ない。だったら、引き受けるのが正解なんではないだろうか……

などと考えているうちに、着いてしまった。

「あら、意外にお早いお帰りですね」

大屋さんが『予想外』という様な、タイミングを逸した時の様な表情をした。例えるなら、サッカーの試合で、ゴール前で急にパスが来たので、うまく対応出来なかったフオーワードの様な顔。そんな大屋さんにすぐに「断ってきたよ」と言いたかったが、今の段階で色よい返事が出来るものではない。少し申し訳なかった。

「うん、まあ。疲れた」

「どんな人でした？」

「大方、予想通りだったよ。予想外に疲れたけど」

「それほどお疲れですか」

「お疲れです」

大屋さんが、少し言いにくそうに、聞いてきた。

「それで、どうなりました？」

「実は大屋さんには悪いんだけど……迷ってる」

それを聞くと、大屋さんは「やつぱり」と言いたげな顔をした。職場の仲間にこういう顔をされながら仕事はしたくないのだけど、今はしょうがないよな。

その時、思考を遮るノックの音があつた。

「私が出ます」

入ってきたのは、歳の頃なら二十七、八、三十凸凹と言つた所だろうか、生活感のある女性だ。つかつかと早足で僕に近づいてくる。

「主人のことでお願ひがあります。弁護しないで頂きたいんです」

出し抜けになんだと面食らつたが、そうかこの人が平谷間の奥さんか。

「立ち話ではなんですから、どうぞ奥へ」

「それで、ご主人というのは」

「平谷間茂です。わたしは妻の文子と言います。もう主人から話はお聞きになつたかもしれませんが」

「先生」

うん、分かつてる。僕らの仕事には、守秘義務というものがある。職務上知り得た情報について、他人に話してはいけないというものだ。今回の場合、あくまで本人からの依頼であるから、家族に対しても話せないこともある。家族と言えども、利害関係はある。まるつきり一心同体と見なすわけには、やはりいかないのである。

「すいません、まずお話の前に、私たちはどなたから依頼を受けている等々のお話できません。その平谷間茂さんという方から依頼を受けている、いないに関わらず、こちらはあなたのお話を伺った上で、話せる範囲で返答をさせていただきます。ですから、あなたは見当違いの弁護士に話をしている可能性がある、ということですよ。その点を予めご了承ください。

それで、あなたの仰る平谷間茂さんというのは、殺人容疑で逮捕されたと報道されているあの平谷間さんですね？」

「ええ、その平谷間です」

「もし宜しければなんです、奥様であることを確認させて頂けますか」

「あ、ごめんなさい。免許証で良いかしら」

写真と名前を確認する。確かにこの人は平谷間文子さんで間違いなようだ。厳密に言えば平谷間茂の妻であることを証明しているわけではないが、とりあえず妻だと認識して

おいて問題はないだろう。

「お茶どうぞ」

「どうも」

大屋さんがお茶を文子さんと僕の前に出す。僕は免許証を文子さんに返した。

「ありがとうございます、お返しします」

「もういいですか？ それでなんですか」

「先生、まだ一つ忘れてます」

大屋さんが小声で僕に言った。

「相談料……」

あ、そうか、うっかりしてた。そうだよな、これ仕事だもんな。いけないな、ぼーつとしている。仕事だと、お金をとるもんなんだよ。善意の人生相談じゃ、ないからね。

「すいません、もう一つ。えつとですね。いきなりお金の話になって申し訳ないんですが、ここから先のお話は法律相談になります。うちでは相談料を三十分につき五千円と決めています。よろしいですか？」

「はい、大丈夫です」

大屋さんの方を見てみる。広隆寺の弥勒菩薩のような微笑でこちらを一瞥して自席に

戻った。どうやらもう忘れ物はなさそうだ。

「あの、いいですか？　うちの主人に弁護を頼まれたと思うんですけど、その弁護、引き受けないでもらいたいんです」

「何か事情でも？」

実の妻が夫の弁護をわざわざ断りに申し出てくるというのだから、それなりの理由があるだろう。こういうことはないわけじゃない。大抵は金銭的な問題だ。

「言いいくいんですけど……主人にはこの際、有罪になつてもらいたいんです」

言いいくい、と言いながらはつきりと言った。僕には、この発言の意図がはかりかねた。「有罪に、というのと、どういうことですか？」

「ご存知だと思えますが……死んだのは、息子です。わたし、許せません。弁護士なんて絶対つけさせない。何で、あの子が死ななきゃいけないかつたのか……」

余計なことを聞いてしまったかもしれない。彼女の言う通りだ。いくら夫であつても、自分の子供を殺した、となれば、愛情なんていうものもどこかに吹き飛んでしまうものだろう。だが、恐らくこの人は勘違いをしている。

「そう言うことですから、あの、弁護の方を……」

「お話は分かりました。ですが、仮に誰も弁護人が手配されなかつたとしても、こういっ

た大変な事件には国選弁護制度という制度によつて、必ず誰か弁護士がつくものなんです。あなたのご希望のように、弁護人が居ないために有罪になりやすい、ということにはなりませんよ」

「……そうなんですか。いえ、それでもかまいません。あの人の希望はあなたのようなのですから、あなたが拒否して下さればそれだけでも随分違います」

「……………」

つい沈黙してしまふ。この流れだと次の言葉を何と返して良いか分からない。そもそも自分自身態度を決めかねている状態なんだ。

「あの、お願いします」

「私の方では、ここで『はい』とも『いいえ』とも申し上げることは出来ません。お話は伺いました、とだけお答えしておきます」

僕にはこうとしか言えない。

「えつと、お話は以上でしょうか。三十分までまだ随分ありますが」

「あ、じゃ、あの、少し話が変わってもいいですか？」

「はい、なんでもどうぞ」

「今後のことなんですけど……」

その後、離婚の話を軸に年金やら保険金やらの制度的な話をし、その中で死んだ子供が一人息子であったことや、平谷間が良い夫であったこと、自分も妻として、母として頑張つて来たことを聞いた。彼女には、動機が分からないということであった。

「どうも、ありがとうございます」

「お役に立てましたかどうか。また何かありましたら、いつでもおいで下さい」

「はい、それでは失礼します」

文子さんを玄関まで見送る。振り返ると、大屋さんが何やら難しい表情をしていた。

「どうかした？」

声を掛けてみたけれど、ひたすら何か考え込んでいるようだった。

「大屋さーん、どうしたのー」

「え、あ、いえ、なんでもありません。あ、それでどうするんです？」

「なにが」

「依頼ですよ。引き受けるんですか？」

そうだ、そのことについて考えないといけない。ただ、今の僕には判断の決定打がない。大屋さんに僕の葛藤を聞いてもらおうか。僕の今の心境を整理する意味でも、言葉にしてみるといいのかもしれない。

「まだ、悩んでるんだ。正直に言うと、引き受けたくない気持ち強い。平谷間に直接会って、あの人間は僕の手には負えないと思った。だけど、そこを我慢して、やろうと思えば出来ると思う。事件自体は簡単だろうから」

「出来るでしょうね」

出来ることは出来る。けれど、かなり精神を疲弊させるであろうことは容易に予想出来た。

「先生。確かに私は、反対しました。でも、先生が先ほど『迷ってる』と仰った時、引き受けることに心を決めておいでなのかと私は思っていました。もし私に気を使ってくださってるなら、気にしないで下さい」

今天秤に乗っているのは、片方には大屋さんと僕の気持ち、もう片方には僕の弁護士としての信念だ。弁護士とはこうあるべきという理想像のようなもの。……随分簡単に揺らぐ信念だな。信念があるなら、二つ返事で引き受けているだろう。

「意外です」

大屋さんの急な言葉に、なにが、と思った。

「先生は、いつも淡々と仕事をされてます。こういう時に悩む人ではないと思ってました。意外と、優柔不断なんですな」

確かに僕は優柔不断だ。昔から分かってたけど、あらためて、それも女性に言われると情けない気持ちになる。

「差し出がましいかも知れませんが、先生、こういう時はどちらを選んでも同じです。後悔しないようにはいかないのですよ。それと、気持ちに正直に生きるのは、別に悪いことじゃないです」

大屋さんの言葉がちよつとだけ、母親のくれる免罪符のように聞こえた。けれど、それも判断の決定打では無かった。

午後六時。仕事を終えて自宅へ向かう道はもう濃紺から黒になっている。いくら暖冬と言われていても、これだけは季節感として残っているんだな。夕闇に包まれる一人の帰り道も静かで悪くない。寂しいけれど。

結局、結論は出ずじまいで帰ってきている。明日までには決めておくから、と言って先送りにさせてもらったのだ。今日は疲れているからダメだけど、一晩ゆつくり休めば、整理もついて覚悟も決まるだろうと思う。

自宅に着く。築何年か知らないけれど、少なくとも僕が生まれた頃には既にあつたこのアパートに僕は住んでいる。トイレと風呂さえついていれば問題がないので、家賃の安さには感謝している。少しくらいぼろつちくたつて住めば都、なかなかよい作りなのだ。ただ、

ドアを開けた時の侘しさは何とも言えない。こればかりはどこに住んでいても同じ、一人暮らしの究極の弱点だと思う。扉の向こうの闇に向かって放つただいまは、十秒ぐらいそこらにこだまする。

「あ、おかえり」

あれ。何で電気がついてるんだろう。それに今聞こえたのは人の声だ。どんなにタイミングよく部屋が軋み、その音が室内を反響して且つ共鳴によつて奥深さのある響きを得たとしても、人間の声とは流石に聞き間違えない。とすると変だな、僕は一人暮らしのはずだ。一人暮らしして言うのは一人で住んでるんだから、僕が外にいる時には何者もないはずだ。1ひく1は0だ。そうだろう。つまりこれは通常想定し得ない事態が何か起こっているつてことだ。例えば、そう。僕が部屋を間違えたとか。

「あは、やつぱり驚いてる。お邪魔しますよ」

そう言つて出てきたのは、少女。……僕は、この眼差しを知っている。不敵に歪むこの唇を知っている。風になびく後れ毛を知っている。片側の横髪だけ縛るこのスタイルを知っている。この子は、僕から数えて第四親等に当たる人物である。一般的な語で言えば従妹。思わぬサプライズに、呆気にとられてしまった。

「あれ、怒つてる？」

「どうやって、いや違う、なんでここに？」

木下まぶこ篤子。確かにこの子の家とこのアパートは物理的には遠くない。せいぜい一駅分の距離だ。だけどそれはこの子が僕の部屋にいる理由にはならない。そうでなければ、今までの生活で僕の家に『ただいま』は虚しくこだましていないはずだ。つまり、この子は何らかの事情があり僕を訪問せざるを得ない状況にあった。しかし僕が自宅不在のために合意の上での進入が不可能となり、他の強制力のある手段を用いての侵入を試み、成功したということだ。

「お父さんと喧嘩しちゃって」

少し状況が飲み込めて落ち着いてきた。とりあえず鞆を置いて座って話をしようじゃないか。

「叔父さんと喧嘩して家出してきたのか。それでどうやって入ったのかな？ 鍵は閉めていったと思うんだけど」

「管理人さんにね、妹ですって言って生徒証見せたら開けてくれた」

ニコニコしやがって。

しかしうちの管理人不用心過ぎないか。木下なんて珍しい名字でもないんだ。まだ子供だからって人をだまくらかして犯罪に手を染めないだろうという認識は甘すぎる。現に嘘

をついてるんだぞこいつは。妹じゃない、従妹だ。

「そうか。それで、どうするつもりかな」

「今日泊めて欲しいんだけど」

「それは無理だろう」

「なんでよ」

「叔父さんに黙ってきてるんだろ。僕が怒られるじゃないか」

「怒られるから出来ないのかね君い。自分の意思を持ちたまえ、自分の意思を」

「叔父さんが心配する。帰った方が良い」

親つてのは子供がのんきに外で遊んでるだけでも心配してるものだ。一晚帰らなかつたら警察沙汰になる。というか僕の立場を少しは考慮してもらえないだろうか。ここでお前を泊めて、叔父さんに睨まれるのは僕なんだよ。

「別に、特別心配しないんじゃないかな」

「そんなことないだろ」

「そんなことあるんだよ。お兄ちゃんは知らないだろうけど」

そう言つて目を逸らした。親子関係、僕が知らない間に悪くなつてのだろうか。

「それにお父さんにも、一応出てくる時に、泊まってくるつて、言つてあるし」

「僕の所について、そう言ったのか？ 良いつて？」

僕の詰問に黛子は俯く。どうやら、叔父さんが了承しているわけではなさそうである。

「僕と一緒に謝りに行こうか」

「そういうんじゃないの。それにあたしが悪いわけじゃないもん。いいから泊めて。それで問題は解決なの」

いやそれは解決にならないだろう、と言いかけたが、黛子の目に幼い決意が感じられて、ここで無理に追い返せばきつと誰か友達の所にも泊まることになる、それならまだ僕の所で預かった方が良いだろうと思ひ直した。ここに泊まるなら、とりあえず安全ではある。一晩明けてほとぼりが冷めたら帰ってもらえばいいんだ。

「どうしても帰りたくないんだな？」

「どうしても帰りたくない」

「しょうがないな、今日は泊まっていつていいよ」

「やった」

「ただし、僕から叔父さんに電話をしておく。それだけは条件だぞ」

「それはダメだよ、連れに来るじゃん」

「その時は諦めるんだな。僕からも頼んでやるから、それでいいだろう」

黛子は少し渋りながら考えていたが、現状で泊まるのを僕に許可させる手段が他にないことを悟ったのだらう、一言、うん、と返事した。僕は洗面所で手洗いとうがいを済ませてから叔父さんに電話を繋いだ。

「はい、木下です」

「もしもし、昇です。叔父さんですか？」

「昇くん？ ……ひよつとして黛子、君の所に？」

「ええ、うちに来てます。心配されていると思つたので、一応電話を」

小さく安堵のため息が聞こえる。

「ごめんな、うちのことでも迷惑をかけちゃって。すぐ、そっちに行くから」

「それなんですけど、今日は黛子をうちに泊めてやろうと思つてます。どうも黛子のヤツどうしてもそちらに居たくないらしくて来たようですから、無理に帰してもまた飛び出すかもしれませんし、それなら今日はうちで預かつて明日帰らせるようにした方が危険もないと思うんです。そういうことでどうでしょう」

電話の向こうの叔父さんは、うーん、と唸つたあとに

「それは……いいんだが、迷惑じゃあないかい」

と言つた。

「一人暮らしの寂しさが紛れますんで、ありがたいぐらいかもしれない」

「は、と冗談めかしながらと返すと、叔父さんは疲れたように、じゃあ悪いけど黛子のことを宜しく頼むよ、すまない、とだけ言つて、電話を切つた。」

「危険がないかどうかは分からないけどね」

「黛子が冷蔵庫を勝手に開けながら何か言っている。ああ、トラックが突つ込んできたり？ 冷蔵庫、何もないね」

「一人暮らしで自炊も殆どしないんだから、そりゃ何も無いさ。今日だつてこれからコンビニに買いにいこうと思つていた所だつたんだ。」

「食いに行く？」

「ん、それより、買いに行こ。まだアルファマート開いてるはずだよ」

「アルファマートはスーパーだよ。今から食材買つてきて料理しようつてか。」

「あんまり面倒なのはやだな」

「料理はあたしがやつてあげるから、買い物は一緒に行こうよ、ね。お金ないし」

「白菜一玉九十八円、ニンジン三本で百九十八円……安いのか高いのか分からないんだなあこれが。タイムサービスとかあるけど、元の値段が分からないからどの程度おトクなのかも分かんなかったり。黛子はぼんぼんとカゴに入れて行く。何を作る気なんだろうか。」

慣れない。そもそも食料品売り場を巡る習慣がないもんだから、どこに何を置いてあるのかも分からない。結局黛子について行く形でカゴ持ちをしているだけだ。周りからはどう見えているんだろう。兄妹に見えてるんだろうか。親子……はなないよな。

値段を見て、賞味期限を見て、メインクーンみたいな名前のじゃがいもの袋をあらゆる角度から見回して傷が無いかチェックする今の黛子が、どうしてもオバ……主婦に見えるのは、黙っておこう。

結局何を買ったのかいまいち把握出来ないまま帰宅して、米を研いでスピード炊き上げでセットしろと言われたので、言われるがままにセットする。

「後はあたしがやっておくから、テレビでも見て待つてなさい」

見ろと言われたので、言われるがままにテレビを見る。この時間じゃ、ニュース番組はもう終つてる。まあいい、ゴロゴロしよう。

寝転がりながら、黛子がちゃっちゃか動いてるのを見る。そう言えば黛子が料理する所を見るのは初めてだ。そもそも、ここ三年ぐらい会っていなかったんだ。考えてみれば随分久しぶりなんだよな。他の家庭がどういう親戚付き合いをしているのかは分からないけれど、僕と黛子が一緒に過ごす時間は結構多かった。それは父と叔父が良かったこともあったのだろうけど、恐らくはそれ以上に母と叔母の仲が良かったからだ。僕が黛子

に初めて会ったのは僕が十歳の時。彼女はまだ生まれたての赤ん坊だった。叔母の実家近くの病院で彼女が生まれたとき、夕日を讀えた薄黒い稜線が窓からとても力強く見えたのだった。

黛子が生まれてから、叔母は黛子を連れてちよくちよくうちに来る様になった。僕は一人っ子で、黛子も叔父、叔母の初めての子供だったから、親たちはきつと『きょうだい』というものを教えたかったのだろう。僕はインドア派というか、外で遊ぶのがあまり好きではなく、漫画とかテレビゲームで日々を消費するタイプの子供だったから、黛子と過ごす時間も多かった。黛子が親指を動かせる様になったぐらいの頃にはもうゲームのコントローラを握らせていたと思う。おしめがとれるよりも前だっただろう。そうやってゲームをやらせていけば黛子がおとなしくしていて面倒が見やすかったということもあったし、僕と同じくらいに操作出来る様になれば、一人でやるよりもずっと楽しくなると思った。

やがて黛子が自律二足歩行を出来る様になり、七五三を終えて新入学を過ぎても、黛子はうちにちよくちよく来てはゲームをやっていた。僕は高校生だったけれど、他の多くの高校生の様に若者の街で遊ぶという様な生活にはならなかった。やはりインドアが性にあっていたので。この頃は、思えば一番多く黛子と一緒にゲームをやっていたように思う。黛子が十歳のとき、叔母が亡くなった。交通事故だった。僕は、近しい人がいなくなる

悲しみよりも割と人間はあっさりとして死んでしまう無常観の方が、自分の心に何となく染み渡っていくように感じていた。それ以降、黛子は前よりもうちに多く来る様になった。赤飯もうちで炊いた。けれど、それから二年して大学を卒業し、学業だけが自慢だった僕は同時に司法修習生となり一人暮らしを始め、黛子とも会わなくなつた。僕が二十二歳、黛子が十二歳の時のことだ。一年前にこの町に戻ってきたけれど、黛子はその頃にはもう、僕の実家には殆ど寄り付かない様になつていたようだ。

僕たちの過ごした時間は、『いとこ』というよりは確かに『きょうだい』に近いものだったろう。とはいえ一つ屋根の下で暮らしていたわけでもなく、境遇も大分違つてしまつた。そのまま会わずに三年経つた今、僕らの距離はどうなつてゐるのだろうか。僕はともかく、黛子にとつてこの三年間は随分と変化を強いられたものだったに違いない。実際、黛子の物腰も顔つきも、僕の知つてゐるものとは變つてゐた。

「出来たよ。お皿お皿」

言われるがままに（何度言われるがままに行動してゐるのだろう、今の黛子の言葉には抗えない何かがある）皿をならべる。箸は僕のものしかないから、蓄えてある割り箸を二人分出した。あと大皿も、と出すと、黛子は少し重そうにフライパンを傾けた。

「ちよつと脂が多めだったから搾つた方が良いかも」

料理を見る。確かに汁多めの肉野菜炒めと、形の良い厚焼きたまご。そしてスピード炊き上げで炊きたてのご飯とみそ汁。感心した。僕が少し感慨に耽っている間に、しっかりとした晚ご飯を作り上げたのだ。

「美味しそうだ」

そう素直に言っていると、黛子は少し照れた様にして、早く温かいうちに食べよ、と水を向けた。作り立てということもあるのかもしれないが、それ以上に普段から作り慣れている安定感が黛子の料理にはあった。美味しかったのだ。それが僕の胸を苛んだ。今の黛子はまぎれも無く主婦なのだ。母親を失ってから、黛子は主婦なのだ。

「どうしたの？ あ、薄かったかな。お父さん血圧高いから癖でさ」

「いや、そうじゃないよ、美味しいよ。いま仕事の考え事しててね、ごめんごめん、飯に集中します」

黙って変な顔を僕はしていたのだろう。黛子に要らんこと言ってもしょうがないから適当に取り繕ったのだけど、次に黛子の口からでた言葉に僕はもつと変な顔をする。

「……神のお告げ事件？」

どうして、それを。

いや、別に知ってての発言ではないかも知れない。僕が弁護士をしていることは黛子

も知っている。この町で最も最近起きた大事件だから、もしかしたら僕が関わってるかもという当て推量からの質問の可能性は十分にある。このタイミングで認める様な発言は上手くない。

「何でそう思うの？」

これぐらいの軽いノリで聞き返した方が良い。これは認めたわけでもなく否定でもなく、相手の情報量をはかれる良い切り返して結構気に入って使っているフレーズだ。

「ほら、妹の義務でしょー。そう言うのを把握するのは」

……知っているのだ。どうやら黛子は僕がああ事件に関わりがあると知っている。黛子はいたずらっぽく言ってみせたが、その目は確信に満ちていた。

なぜ事件が起こったのが昨日、依頼を受けたのが今日だ。いくら何でも情報が速すぎる。黛子に知られること自体はそんなに大きな問題じゃない。黛子は口に戸を立てられるタイプ、言わないでくれと言っておけばむやみやたらに人に話す子じゃあない。しかし、僕以外のルートで情報が出回っている今の状況が問題だ。

「そう言う義務は聞いたこと無いなあ。一応言っておくけど、僕の仕事のことでは何か知ったことがあっても人に言わないでくれよ。内容によってはまずいことになったりもするから」

「わかってるって。ナントカカントカがあるって言うんでしょ」

守秘義務、な。

「うん。それで……どこで知ったんだよ」

そう訪ねると、黛子は少し気まずそうに、照れくさそうにして口を重くした。

「ま、良いじゃない、そう言うの」

あんまり良くはないんだけど、せつかくの食事の団欒の空気を壊してまでは聞けることではない。それに依頼人が誰かなんてのは僕が情報を発しなくても、割と簡単にバレることではある。事務所に入入りしている人間を外で張ってチェックすれば、それだけでもおおよその見当はつくものだ。情報の速さは気になるけど、大事にはならないだろう。

この話は、置いておこう。

それよりも、今は他に気になることがある。

「美味しい」

「えへ、そりゃあ、ね。あたしが作ったんだもんね。ふふ」

「なあ、叔父さんと喧嘩したって、家出するほどのことなのか？」

瞬きの後、黛子の表情が曇る。勿論そうなるかと分かって聞いていた。この問題はさっきのものと同様、今の空気をぶち壊しにしても聞いておいた方がいい。黛子の生活に何か大

きな問題があつてここに来たのなら、僕に助けを求めているのだ。ただ何となく来ただけなら、それはそれで良いのだけど。

「ん……ご飯食べ終わつてからでいいかな」

「ああ、いつでもいいし、話しくかつたら話さなくても良いよ」

「うん。ごめんね」

少し気まずい空気をごまかす様に黛子はテレビのチャンネルをお笑いに切り替えた。

食事を終え、二人で並んで洗いものをする。三年前まではよくやつていたことだ。僕が洗つて黛子が拭く。黛子、背が伸びたなと、この時初めて実感した。

しばし黙つていた僕たちだったが、そのうち黛子がぽつりぽつりと話しだした。

「……お父さんがね、再婚したいんだつて……良い人なんだよ、とつても。お母さんには似てないかな。お父さんが結婚したいつて言う気持ちも、分かるんだ。何回もうちに来てるし、その人のお料理も食べたことある。上手なんだ、凄く。

でもね、なんか、やなの。今日もさ、別に本当は、喧嘩して来たわけじゃないんだよね。分かつてるの、あたしのわがままだつて……のは、さ」

叔父さんの再婚。恐らく叔父さんとしても、黛子に苦勞をこれ以上かけまいとして、家庭派の女性を特に選んでいるのだと思う。それでも黛子にとつては、母親の存在を否定さ

れる思いなのだろう。

「迷惑かけてばっか、だよね。お父さん、怒ってるよね。お母さんも」

「僕は怒ってないぞ」

「……うん」

「みんなもな」

それつきり、考え込む様に、言葉に詰まった様に、黙りこくってしまった。

「黛子は、どうしたいんだ」

そう聞くと黛子は俯いたまま、僕の服の裾をつまんで、本当に微かな声で呟いた。

「……お兄ちゃん、うちで、一緒に暮らそ」

ちよつと意外な返答だったが、解消するのに僕が必要だということが、黛子の寂しさが僕の予想以上なのだと示していた。僕で埋めようとしなければならぬほど、黛子の心は穴だらけなのだ。

「ただそれは現実的には難しいだろう。甥が叔父の家の世話になること自体は珍しいことじゃないけれど、経済的に自立もしていて、実家も健在な僕がそのような状況になることは、普通あり得ない。」

じつとしていたる黛子の気持ちが右手から伝わってくるから、辛い。少しの間ためらった

が、しかし黛子に嘘はつけない。

「それは……多分無理だよ。分かるだろ？ 僕はもういい大人なんだ。今から叔父さんの厄介になることは出来ない」

アルミの洗面台を掴んでいる左手が震えている。絞り出した声も震えていた。

「……じゃあ、じゃあ、あたしと、結婚、してよう、うう……」

僕の服の裾を握る手が強くなつて、嗚咽が漏れる。

「あたし、来年……十六歳だから、結婚出来る……でしょ」

黛子が僕と暮らしたいと言っているのは、黛子の中で消え去りつつある家族の一員が、僕だからだろう。僕と一緒に暮らしていれば、それが黛子の知っている安心出来る家庭なのだ。

黛子はもう本格的に泣き始めていた。寂しさに押しつぶされている黛子を僕はとりあえず僕の肩で泣かせておくしかなかった。僕に寄りかかっているけれど、きつと叔父さんにはこういう風に甘えられなかったんだろう。再婚しようとしているのはその叔父さんなんだから。

黛子の願いに、いいよ、と答えてやりたかった。黛子がそれで少しでも救われるのならいくらでも気のいい返事をしただろう。だけど、黛子は賢い子だ。こんな感情の昂つてい

るときできえ、僕が実現可能性を考えて返事をしていかどうか感じ取れる感性と知性を持つてる。いい加減な返答は黛子突き放してしまうだけだ。僕はひたすら、沈黙するしか無かった。

僕が黛子にしてやれることを真面目に考えてやらなきゃいけない。僕に何が出来るか分からないけれど、このことを言う為に、黛子は今日うちに来たのだから。

しゃっくりの様に息を吸うたびに揺れる。折れたホースを通す様に息を押し出すたびに、黛子の孤独が伝わってくる。黛子を不憫に思うと同時に、自分が頼られているということが少し嬉しかった。やっぱり、僕は不誠実だ。

風呂に入らせて歯を磨かせたあと、すぐに寝かしつけた。布団は一組しかないから、僕は毛布にでも包まって寝るつもりだ。多少厚着していれば大丈夫、寒くあるまい。多分。ダメならエアコンで対処するまでだ。

さつき黛子の料理を食べた時に感じた罪悪感を思い出す。黛子がこうして寂しい思いをしているのは、きつと僕にも責任があるのだ。三年前には他にすべき事があつて、僕にはどうしようもなかった。だけど、それでもやっぱり僕に責任が無いわけじゃあない。黛子がひとりぼっちになつている事を知っていて、何もしなかったのだ。

今、黛子の孤独感を解消する方法はそんなに多くはない。大別すると、僕と一緒に暮ら

すか、僕の実家で暮らすかの二つだろう。黛子の慣れ親しんだ人達だけで構成された、甘えられる環境が必要なのだ。実の父であっても、だからこそ難しい事が世の中にはある。だからもう一つの家族の僕らが支えてやらなくちゃいけないんだろう。

「……あれ、まだ寝ないの？」

もぞもぞと布団の中から黛子が顔をこちらに向けて言う。

「起こしちゃったか。悪い」

黛子は僕の目を探っていたが、思いついたように上半身を起こした。

「あ、そつか。布団一つしかないんだ。あたしが寝てたらお兄ちゃん寝れないよね」

「気にしないで寝てればいいんだよ。僕はどうにでもなるんだから」

でも、と黛子は言いかけてやめる。僕の強情を知っているから。

「じゃあ、一緒に寝る？」

……小さいときはそう言う事もしたけどな、この歳になつてそれをするのは些か問題があるのではないか。黛子も、年頃だろう。第二次性徴を終えた両性が一つの布団で寝るつて、同衾つて言うんだよ、普通。

「昔とは違うんだぞ」

「分かつてるよ、でもあたしのせいで風邪、ひかれたくない」

はい、と黛子は一人分のスペースを空けた。かろうじて一人入れるスペースを。

こうなると、恥ずかしがってる僕の方が子供みたいに思えてくる。でも、客観的に考えて僕間違つてないよな。普通、ここ、断るよな。毛布被つて寝てるのが正解だよな？ あ、でもここで断つたら、今の黛子だと傷つくか？ それは避けたい……がしかし……

なに窮してるんだ僕は。思考が定まってるぞ。冷静にならないと。

……正直、倫理違反な気もするけど、僕が無理をしている様に見える状況は黛子に負担をかけるかも知れない。

「しょうがないな、じゃあ、お邪魔しますよ」

そう言いながら僕はゆつくりと布団の方に近づき、入る。枕が真ん中にあるけれど、黛子は枕から頭を外している。やはり狭い。僕の肩から腰の三分の一ぐらいは外気に触れている様な状態である。黛子の頭が、僕の胸の位置に近い。

「なあ、枕使つていいんだよ」

「あたしはいいよ、お兄ちゃんの腕枕で」

いやいやいや、そんな事出来るか。恥ずかしいし、人の頭を一晚腕に乗せたら痺れて動かなくなりそうだ。

「つまんないの。じゃいいよ、枕もらう」

黛子は、つうつと自分の方に枕を引つ張った。なんだかんだ言つて、僕は自分に腕枕をする事になるわけだけど、それは恥ずかしくないから良いや。

こうやつて無理に二人はいるから、やつぱり姿勢にも無理が生じる。寝返りが打てないのは辛いな。

「もうちよつと寄つても良いんだよ、こつち」

黛子がもう少し僕にスペースの占有を許してくれるけれど、それもなんだか気に食わない。黛子がある程度快適にと思つて布団を提供しているのだから、僕が割を食つてもそれは全うされないと、なにがなにやら。と言うか、これ以上接近するのが怖いのだ。これ以上は、兄妹の距離ですらないのではないか。もつと親密な男と女の関係の距離だとするなら、僕にとつてそれは黛子であるべきではないし、黛子にとつて僕であるべきではない。だから、近寄らない。

意識し過ぎだろうか、たかが十五歳の少女相手に。いや、むしろ十五歳と言う微妙な年齢だからこそ、意識するのではないか。これで黛子が二十歳を過ぎた立派な大人であれば、それだけ接近する事もこれほどには問題にならない。お互いに大人としての分別がついてゐるからこそ、その距離はあり得るかもしれない。逆に十歳を下回る年齢だったら、エロ

ス的關係自体が成立しないのだから、それも問題にならないだろう。でも黛子は十五歳なのだ。性的には大人の土俵に立っている、とても危ない子供だ。

「いいの？　そ、じゃあ、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

黛子は体をこちら向きにしたまま、目を閉じた。

さて、僕はこんな状態で眠れるだろうか。僕も上を向いていたのでは眠れない夕チなので横を向いて眠りたい所なのだが、どちらを向くか。左を向けば、黛子と体を対面させて眠る事になる。逆の方を向くと、人間の肉體構造的に考えて、尻と言うか腰の部分が黛子の方に寄るだろう。それは良くない。出来れば接触すべきではない。従つて黛子の方側を向く様に体を傾ける事にした。布団を動かさない様に、慎重に。

黛子の寝顔が見える。可愛いと思う。全ての悲しい感情から放たれて、眉は弛緩し、実に穏やかな表情をしているのだ。人の顔をまじまじと観察するのは、寝る時ぐらいいしか出来ない。黛子が赤ん坊のときの事を僕は思い出していた。

子守りをしたものだ。泣いて、おしめを替えたら、安心してまた寝る。こうやって寝ている黛子をじつと見つめているのは、あの時以来の様な気がする。今日も泣いて、そして寝ている黛子の姿を見ているのだけど、今日の寝顔に僕はあの時に感じなかった安心を覚

えた。

黛子と僕が共有しなかつた三年間は、黛子の生きた時間で僕が全く知らない時代だ。今日までその時間の事を気にも止めなかつたけれど、黛子にとつては僕がいた方がよかつたのだろうか。黛子の側に、他に誰もいてやれなかつたのか。僕は結局何も知らない様に知らない様にと努めて来たのだろうか。

僕が知っているのは、子供の表情の黛子だけだつた。それが、今日は大人の顔をした黛子に会つた気がしている。少し切ない。けれど、こうして見る黛子の寝顔は、赤ん坊の時となんら変わらない、無垢な安心しきつたものだつた。

「……ん、まだ、起きてる？」

黛子が薄目を開ける。

「ああ、やつぱり寝付けないんじゃないか？」

「いや、そう言うわけじゃないんだけどね」

そう言つてまた黛子は目を閉じる。閉じて、すう、すうと息を立ててから、黛子は呟く様に話した。

「ねえ、夏祭り……じゃない、花火……花火大会の事おぼえてる？ 皆で行つた花火。いつだつたかなあ。あたし、迷子になつてさ、ひとりぼっちであの広い土手にいて、泣いて

てね」

覚えてる。後にも先にも、花火大会を見に行ったのはそれ一回きりだから。黛子が迷子になったのも、それを僕が探しに行ったのもよく覚えてる。

「それで、お兄ちゃんが、探しに来てくれて、見つけてくれて、あの時は嬉しかったなあ……あたし、花火の事なんて一個も覚えてないのに、これだけ覚えてるんだよね。あの時から、お兄ちゃんは、お兄ちゃんなんだなあって」

目は相変わらず閉じたまま語る。

「お兄ちゃんは、お兄ちゃん、あたしは、妹で、いいよね。それでいいよね。明日、起きてから思い出したら、恥ずかしいんだろうなあ。寝言、寝言。きにしないきにしない……」

言い終わったのだろうか、その後は、ただ寝息を立てるだけ。黛子の顔を眺めながら、僕もあの日の事を思い出す。黛子を見つけた後、僕も一緒に迷子になったのだ。僕は携帯電話を持っていただけ、電波が入らなくて、結局黛子の手をひいてあたりをぐるぐる回っていたら、運良く家族の姿を発見出来たのだった。情けない話だが、黛子の中ではきつと頼りになるお兄さんだったのだろうか。

兄妹の様で兄妹でない距離でも、黛子が僕の事を兄貴だと思えばそれが正解だ。だっ

たら僕は兄貴として、黛子が辛い時に甘えられる様な存在でいてやりたい。僕だけでも、黛子にとって変わらない存在であること、変わらず兄妹でいられる事が、大事なんだ。

きつと叔父さんの再婚で、黛子は家庭を取り戻せる。きつとうまくいく。だから僕は暫時の兄でいい。新しい家庭を黛子が受け入れるまでの、ちよつとした逃げ道。

きつと、それ以上の事は出来ない。

森の中。僕は走っている。一所懸命、エンヤコラエンヤコラ走っている。目的地がどこなのかは分からないけれど、結構期待を持って走っている。

さて、この状況なのだけど、僕はもう気付いているんだ。ここは夢の中。夢の中で夢を見ている事に気付く事は結構多いのだけど、その夢の中で何をしたらいいのか、それが分からない。

ハーレムを作ってみようか。それとも、空を飛んでみる？ 超能力を使える様になっても楽しいかもしれない。そんな風に夢の中で夢は膨らむけれど、僕がそう言う事を試してみても上手くいった事がないんだ。色んなおまじないを試してみたけれど、結局僕の夢はかなわず、そうやって唸っているうちに目が覚めるのだ。最近じゃあそう言うチャレンジもやめて、夢の中の物語に従って役割をこなす様にしている。その方が色んなものが見ら

れて面白い。

きつと夢の世界にも秩序があるのだと思う。夢の世界だからって『なんでもあり』だなんて言うのはきつと間違つた思い込みなのだ。

だから僕は今、森を必死になつて走っているのだ。この先に何かがあるか分からないけどきつと良い事があると予感している。血管に入り込んだ抗い難い欲望の沼が大きな龍に飲み干される様な、圧倒的解放感が待っているに違いない。

ああ、楽しみ。

ワッセ、ワッセ。

それにしてもこの森、長いなあ。

しばらくすると、一軒の小ぎれいな木造建築が見えて来た。どうやら僕が目指していたのはこの建物らしい。どうにかして中に入らないといけないのだけど、戸は堅く閉まつていて開かない。困っていると、中から「棧を引きなさい」という声が聞こえたので、言われた通りにするとあつけなく開いた。何故だ。

中に入つて迎えてくれたのは、ベッドに横になつてゐる老婆。しかし僕は何を感じてか、この老婆を死亡せしめねばならないと思つた。ここに至つて全く理由は不明なのだが、とにかく老婆を殺さなくてはいけないらしい。恐ろしい事だけれど、殺さなくては『間に合

わなくなる』という感覚がある。どうせ夢の中と割り切って、直視しないようにしながら首を絞め、遺体をタンスに隠した。何という手際の良さだろうと我ながら感心して、あとは次の出来事を待つばかり。

老婆を絞め殺した両手を見て、ああ、この両手にはそれだけの力があつて、人一人を殺すのも決断一つで可能なのだとちよつとだけ誇らしげに感じ、人を殺すという、人間として一線を大ジャンプで越えてしまった事から、これで僕は違う世界を見る事が出来るという期待に胸が膨らんでいる。

さあ、何が起こるのかな。



四月九日月曜日

今日から日記を付ける事にした。一年続けば良いと思つて、一年分の日記張を買つて、今日がその初日。記念すべき初記入。ペンで一発書きだからちよつと緊張しながら、あと辞書を引きながら危なっかしい漢字を間違えない様に気をつけて書いている。

とりあえず、一日目の今日は始業式でした。成績表を返して、今年受験生だからうん

ぬんかんぬんと先生の話を聞いて、それだけで終了。二週間ぶりぐらいに聡子と会ったけど、あの子受験生って感じのしない子だな。あいつのペースに引つ張られない様にしないとね。不思議なのはあの子もそこそこ、あれで成績が良いって言う所。なんかちよつと腑に落ちないけど。

一年間頑張りましょう。

四月十日火曜日

昨日書き忘れていたのだけど、教科書の配布は既に昨日終えてて、授業は今日から。但し今日は午前中だけで、明日から完全な授業日程になるらしい。授業が久しぶりに感じるけど、相変わらず簡単だなあ、なんて書いたらイヤミに見えるかな。どうせ自分以外見ない物だからいいよね。国語の授業中に、先の方まで教科書を読む。詩だけは理解出来ない。私に感性がないのかなあ。

四月十三日金曜日

今年度初部活。今日は一年生が仮入部でお目見え。あと一月は仮入部期間があると言うのだけど、二人しか見に来なかつたのはちよつと寂しいかも知れない。とは言え沢山来ら

れても困る部活なんだけど。だって、本を読んでもか、さもなきやトランプで遊んでるだけだからね。今日は春休み中の課題図書感想発表でした。顧問の先生がいい人なので、どの感想も間違つてるとか正しいとか言わないんだけど、聡子のあれは無いんじゃないかとちよつと思つた。勿論本人には言わない。

ちなみに私は文芸部……という事も、一応記録として書いておかないと忘れるね。

四月二十日 金曜日

進路説明会。昨年度の卒業生の進路先一覧を渡される。体育館に座らされて腰を痛くしながら聞いた事には、今年一年が勝負なんだと。これまでに積み重ねていない人は大抵駄目だと思えますけど、どうでしょう。实际需要領いい人つているけどね。

殆どの人は進学なんだね、やつぱり。私も進学する事になるんでしょう。

しかし、学校そのものに飽きかけて来ているのだけど、皆どうなんだろう。

五月十六日 水曜日

今日からテスト。恐らく何の問題も無しだけど、何となく気を緩められないから気持ち
は楽じゃない。午前中に帰れるのはいいんだけど。

五月十七日 木曜日

そして今日までテスト。おしまい。珍しく聡子の家に行つて遊ぶ。例のコントローラーを振るゲーム機があった。うーん、あれもどうなのかねえ。私は興味がなかつたりする。そう言えば最近ゲームらしいゲームしてないなあ。昔は結構やつてたのに。お兄ちゃんちに行かないからか。

聡子の部屋にあつたケータイ小説つて言うやつを読んでみたのだけど、なんだあれ。読んでも奴を指差して笑つて良い感じの……つて言つたら聡子怒るかな。独特の感性で素晴らしいと思います。あと聡子の好きな人の話をされた。

卵とタマネギが冷蔵庫に残つてるはずと思つて、じゃあ親子丼でも作ればいいて帰りにアルファマートで鶏肉だけ買つて帰つたら卵ないでやんの。誰が盗んだんだろう。絶対に残つてたはずなんだけどなあ。いや絶対じゃないかなあ。また卵だけ買いに出ました。二度手間。

五月十八日 金曜日

合唱コンクール用の曲決めの日。どれもあんまり歌いたくはないと言うか、こういう事自体がそんなに好きではない私としては不参加という選択肢も欲しい。「大いなる翼を広

げて」とか、恥ずかしくないのかタイトル。

六月二日 土曜日

なおみんに連れられて、喫茶店に行く。何か面白い物があると言われていたのだけど、こんな所にこんなお店あったんだ、つて言う様なオシヤレっぽいお店。ココナッツ……？いやピーナッツとか言ったかな。名前の由来は不明。なんでなおみんがこんな所知っているのかと言うのも不明。値段は少々高めだから、入りにくい所なんだけど。

そんな事より、なおみんの言う面白い物つて言うのが占いだと言うのが面白い。お店の奥さんが占つてくれるんです。なおみんも女の子なのねえ。人殺しドラマばかり見ているから、殺伐とした涙の枯れた女と思いきや。お店の主人が渋くて笑顔を余り見せない人であつたと怖いけど、奥さんは優しそうだつた。タロットで占つてもらうのは初めての経験だつたので確かに面白かつた。また行くかも。

六月十六日 土曜日

またあのお店に行きました。ピーナッツ。コーヒーの種類は沢山あるらしいんだけど、私にはよく分からないので前回と同じくココアを飲んだ。一人で行くのはちょっと勇気が

いったけど、ひよつとしたらなおみんがいるかと思って。うん、いなかったよ。そうしたら、奥さんが私の事を覚えてくれたので、カウンター席に一人でいてもそんなに恥ずかしくはなかった。また占ってもらった。占いというより、あの奥さんが魅力かも知れない。そうそう、占いは一応お金はとらないけど裏メニューらしい。でもやってもらってる人私の他にもいたし、知ってる人は知ってるんだね。カップルっぽい二人もやってもらった。あの人達声大き過ぎで少しうるさかった。

六月十九日 火曜日

合唱コンクール本番。特に滞りなく自分のパートを歌って、何の問題もなく終わる。結果は二位。一学年三クラスで二位って別になんの価値もない二位だよ。

いつも思うんだけど、クラスに一人もピアノ弾ける人いなかったらどうすんだろかね。今日のメニューは棒棒鶏。箱を見ながらじゃないと「鶏」って書けない。前も辞書見ながらだし。しかし電子辞書は便利だ。

六月三十日 土曜日

例のお店にまた行きました。それで、前みたカップル。カップルじゃなかった。双子な

んだって。でも、姉弟であんな所、行くかねえ。でもお姉さんの方とは気が合うかも。メールアドレス交換しちゃった。

七月二日 月曜日

来週は期末テスト。そう考えると気が重い。最近皆、ムキになって勉強してる人が多い気がする。ピリピリしてて気持ち悪い。今まで通り普通に勉強してれば大丈夫だよ。勉強してなかった人は知らないけどさ。

七月十三日 金曜日

聡子とのおみん家に行く。聡子から告白が成功したとか言う報告を受けた。こないだ話してた男子だけど、アレのどこがそんなに良いのかいまいち分からなかった。羨ましい気持ちもないわけじゃないんだらうけど、少なくともアレと手は繋ぎたくないかな。なおみんに好きな人がいるのかどうか、ちょっと気になる。あの子はそう言う話をあんまりしない。私は学校にいる男子に興味を持ってなくなってる。原因は知らない。けど皆バカっぽく見えるから、そのせいかも知れない。幸せそうに笑える聡子が羨ましい。好きな人がちゃんというつて言う事も羨ましいな。最近人を好きになつてないから。

七月十五日 日曜日

誕生日。父がケーキを買って来てくれた。でも、一人で円いのだと大き過ぎるからって、一切れずつになつてゐるやつだった。昔は三人で二日がかりで食べてたなあ。もつと前はお兄ちゃんちでお祝いしてもらつた記憶もある。二人で食べるケーキは、少し寂しい。贅沢言つちやいけないんだけどね。私の顔を見ながら、父が何か言おうとして言わなかつたのが気になる。

七月十七日 火曜日

もう一学期も殆ど終わりだからか、臨時の授業で性教育の話があつた。大まかに言うると、今の所私には関係がない。先生が言うには「セックスは愛をもつて行う究極のコミュニケーションシオンだけど、必ずコンドームは使う様に」だつて。なんか中学生にセックスを推奨してゐるみたいで気持ち悪い。そもそもセックスはコミュニケーションじゃなくて子供を作る作業。あんまり軽々しくするものじゃない。コミュニケーションなんて言つてるから間違いが起こるんじゃないの？

七月十九日 木曜日

この間の父の言おうとしていた事が今日判明。と、その前に成績表の事書いておく。5教科が全部5。実技4教科が技術家庭科が技術で足引つ張つて4。音楽5、美術4、保健体育4。悪くはない。で、父の言おうとしていた事は、再婚の話だった。曰く私の事を思つての事らしいけれど、そう言うの迷惑。今だつて、二人でちゃんとやってけるんだから、私に理由を押し付けられないで欲しい。好きだから結婚したいんですよ。勝手にすればいいと思う。明日夜、その相手の人と会う事になった。名前は美代子さんだつて。まあどんな女か見てやろうじゃん。

七月二十日 金曜日

少し遅くなつて帰宅。相手の人は見てきた。悪くない人だし、嫌いじゃないけど、あの人が私の母親になると考えると違和感を拭えない。「父の恋人」と「私の母」は一致しない。なんだろう、あんまり再婚、歓迎出来ない。でも父だつて、母が亡くなつてから辛かつたんだらうから、してくれた方がいいのかな。「お母さんの事、忘れたの」なんて、子供じみた事言う気はないけど、でもやつぱり私の母親はもう死んだあのお母さんしかいない。だつて、どう頑張つても他人だもん。もつと私が小さい頃だつたら、それでも馴染めたか

も知れないけど、今からじゃちょっと、母親として受け入れるのは難しい気がする。

七月二十八日 土曜日

千尋さんに呼ばれて、あのお店にまた行く。こないだメールで父の再婚の事話したら心配してくれたらしい。おまけに奢ってくれた。千尋さんは実家を離れて暮らしているけど、尋一さんも一緒に住んでいるらしい。それも変な関係だけど、それは置いといて。千尋さんが言うには「気に入らなかつたら、家なんか出て行けばいい。中学卒業したら自由なんだから」だって。でも、一人で生活していけるお金は、稼げないと思う。簡単に言うけど、家を出るなんて、簡単じゃない。

それと、お店で平谷間さんと言う人に会った。その人もよく来るらしい。奥さんと男の子の三人家族で来ていた。千尋さんは元々知ってたみたい。私にも三人家族の頃があったんだな、なんて思った。お母さんの事を思い出してちょっと涙目になってたら、その子がキーホルダーをくれた。慰めてくれるつもりらしい。一応、大事にしておこう。

八月一日 水曜日

夏期講習、私には関係ありません。問題集を買って来て解いてみる。多少、歴史で忘れ

ている所はあるかな。数学とか理科とかは問題ない気がする。社会科を重点的に勉強する事にしよう。

それから、父の再婚の件。今度の休みに、美代子さんがうちに来るらしい。ちよつと嫌いそいと部屋を掃除する父に何となく腹を立てるが、顔には出さず。まだ表立って反対はしていないし、私の今の気持ちも自分でよく分かっている。父の幸せを考えたら私が止める権利はない。相手もいい人だと思う。だけどここは私の家族の領域。あの人は私の家族じゃない。

八月五日 日曜日

美代子さん来訪。会うのはこれで二回目だ。父とは本当に仲が良さそうにしているけど、その映像はやっぱ私の知っている父と母のあの姿とは違う。こちらも仲が良かったのだけど、話し方が違うもの。美代子さんは、母に似ていない。

手料理を作ってくれる事になった。悔しいけどおいしい。でも、私がアスパラガスが苦手だと言うのを知らない辺りが、やっぱりなんか違うと思う。別にそれは彼女の失敗じゃない。ただ家族じゃないから知らないだけ。

これからそう言う事をあの人に知ってもらおう手間より、私が自分で作った方がよっぽど

楽だと思う。父の舌の好みも体調も私の方が知ってる。

八月十一日 土曜日

千尋ちゃんに裏メニユーのもつと裏を教えてもらった。夢占いと言うのがあるんだって。これは奥さんじゃなくて、旦那さんの方がやるらしい。なんでも昔カウンセラーやってたとかで、専門家だとか。でも、あの人、声が出せないんだよね。筆談でそう言う事やるの大変だろうなと思ったら、やつぱりよつぽどの常連じゃないとそう言う事をしてくれないらしい。千尋ちゃんが口をきいてくれたから、今度から私もみてもらえる事になった。面白そうなので、言われた通りに夢日記を付けてみようと思う。

夜見た夢・マンホールの蓋が突然開いて、中に入っていたらウサギの経営してる旅館だった。驚いてすぐ帰ったら、その旅館の空気がマンホールの上の世界に流れた事が問題になっていた。何がいけないのかの理由は判明せず。

八月十八日 土曜日

一週間分の記録を持って、お店に行って見た。水曜日の記録はないのだけど、洋さんに見せたら「価値観の変化を恐れているけれど、それは逃れられない運命」だと言われた。

ちなみに、一応洋さんには「あんまり本気にしない様に。遊びだから」と注意されたけど、何となく信じちゃいそうな気もする。

今日見た夢…お兄ちゃんと一緒にゲームしてる夢。でも新しいゲームだった。真剣にコントローラーを振るお兄ちゃんが滑稽で面白かった。滑稽って言う漢字難しい。

八月二十三日 木曜日

昼寝してたら、またお兄ちゃんの夢を見た。仕事してる所に私が邪魔をしにいつてる夢。そう言えば、お兄ちゃんは今弁護士をしているらしいけど、ほとんど会ってない。暫くよそに行つて、戻つて来ても私にあいさつにも来ない。あの人も今や社会人なんだ。どうしてるだろう。学業では優秀だったけど、私の様に進学に魅力を感じない生活だったんだろうか。なんで進学したんだろう。他に道がなかったからなのか。弁護士になりたいって思ったのはいつだったんだろう。私は別になりたいものはない。ただ、居場所は欲しい。今度会いに行つて見ようかな。

八月二十四日 金曜日

大変な夢を見た気がする。またお兄ちゃんの夢。お兄ちゃんとキスした。なんか、感触

がやたらリアルで凄いドキドキした。まだちよつと残ってる。なんだろ、こういうのは、恋愛感情の現れって言われるんだろか。もしそう言われたら、どうしよう。あんまりそう言うのはいい事じゃないよね。従兄だとしても、なんか一線越えてる。衝撃がちよつと強過ぎてぼーつとしてる。一番衝撃だったのは、嫌じゃなかった事。どっちかっていうと嬉しかった事。

そのあと何したのかは余り覚えてない。インターネットで時間を消費していた気がする。

八月二十五日 土曜日

昨日の夢の話をお恥ずかしながら、洋さんに聞いてみた。「それだけでは何とも言えないけど、単純に異性に対する興味の現れである可能性が高く、お兄さんに恋をしていると言う意味ではないでしょう。お兄さんが、男性代表としてお相手役で出演しただけと思われます」と言っていた。それと「恋は無意識に沈殿する原因というよりは、意識に表出するときの現象ですから、自覚出来るはずです」とも言っていた。なるほど。学校の男子は私にとって男ですらないって事か。

千尋ちゃんの事を今日からちーちゃんと呼ぶ事にした。外はまだまだ暑い。

九月二日 日曜日

夏休みは今日でおしまい。あしたから学校が始まる。でも、何となく今まで通りにいかない気がする。また夢を見た。お兄ちゃんの夢。絶対何かある。もう、会わなくなつて三年経つけど、今になって急にこんなに頻繁に夢に見る様になるなんて、おかしい。ひよつとして本当に恋しちゃつたんだろうか。突然？ はつきりしない。家族として好きなのとごつちやになつてる気がする。会つたらはつきりするのかもしれないけど、はつきりして大変な感情を抱える事になつたら、良くない。会いには行かないほうが良さそうだ。

父の再婚話の続報。また今日、うちに料理を作り美代子さんが来た。私が楽出来るからいいだろうって父は言うけど、家に他人が入る事の方がよつぽど疲れる。それを言つたら父は傷つくだろうか。私は今傷ついてるんだけど。

九月八日 土曜日

父にはつきり言つた。再婚に反対だつて。あの人を母親とは思えないし、家族とは思えないから、私は家事が楽になる事うんぬんかんぬんで嬉しくはないって。そう言う理由で結婚するなら、お断りだつて。寂しそうな顔をしていただけ、父は私に何を求めているのだろう。あの人が好きで結婚したいなら、そう言つて欲しい。私のわがままなんだろうか。

九月十三日 木曜日

なんだか進学したくなくなつて来た。煩わしい事ばかりで、大変だから。運動会の時期が来てこの所体育がきつい。私はあんまり走るの好きじゃないし。高校行つても定期的にあるこういう行事に参加しなくちゃいけないと思うと、気が重い。何が嫌つて、周りにいる友達はそれなりに楽しんでる事。なんだか、凄く距離を感じる。私は必死に走つて疲れても、家に帰ればご飯作らなくちゃいけないんです。皆呑気でいいね。

九月十五日 土曜日

聡子と出かける。最近あつちがデートしてたり、勉強してたり(ほんとうにしてるのか?)で一緒に遊ぶ機会がなかったから久しぶりなんだけど、この所一気にあの浮ついた感じが増大してる気がする。なんであんなに呑気でいられるんだろう。中学生だから仕方ないんだけど、金も稼いでない男と遊びに行くのつて、親の庇護下での恋愛じゃん、結局。そう言うのを楽しそうに話すよね、あの子。違和感ないのかなあ。

九月二十日 木曜日

もうこの際、ちーちゃんに相談しておく事にする。年上に聞く方がいいし、ちーちゃん

なら私の気持ち分かってくれそうだから。土曜日に会う約束をした。

九月二十二日 土曜日

ひよつとしたら、と言う入りから、ちーちゃんに相談する。恋をしてしまったかも知れない。相手は、兄だと言っておいた。私にとつては兄も同然だから、その方が分かりやすいと思つて。三年会つてない事とか、いろいろ言つて、それでこれはまず、恋なのかどうなのか分からないと言つたら、ちーちゃんは「そんなものだと思う。自分の気持ちにはつきり気付いている人の方が少ないよ」つて答えた。「恋かどうかより、どうしたいのか考えた方がいい」んだつて。そうかもしれない。とりあえず、お兄ちゃんとまたゲームはやりたかもしれない。それと「私は誰がどんな人と恋をしたつて、全然構わないと思つてる。本気で好きなんだと思つたなら、私は応援する」つて言つてくれた。どうなるかわからないけど、ちーちゃんはとてもいい人だ。

それより、名前を言つたらちーちゃんが知つてて驚いた。お兄ちゃんのやつてる弁護士事務所が、ちーちゃんの働いてるお花屋さんの真上なんだつて。縁が深いのかな。

九月三十日 日曜日

死にたい。

十月一日 月曜日

昨日の事で、父が謝つて来た。私も悪かったと思う。美代子さんの事を悪く言うつもりはなかったのに、口をついて出た。でも、やっぱり私の気持ちは変わらない。再婚の話があつてから、父と仲悪くなつてる気がする。

十月十六日 火曜日

テスト終わり。夏休み、私よりも必死こいて頑張つたはずの人達が泣き言を言つてたりするのが少し愉快。性格悪いな、私。でもさ、音楽聴きながら勉強なんて成立するわけないでしょ、常識的に考えて。

十月十九日 金曜日

今日は遅くなると出かける前に父が言っていた。美代子さんと逢い引きだよどうせ。あれでしょ、セックスして帰ってくるんでしょ。お父さんも呑気だな。いらいらしたから買っ

て来たお弁当で晩ご飯を済ます。あんまり美味しくはない。帰宅する父と鉢合わせしない様に早めに寝る。

十月二十日 土曜日

お店に行ったら、伊東さん達と平谷間さんがいた。私の兄が弁護士をやっていると話になって、少し誇らしげな気分だった。本当は兄ではないんですが。

十月三十一日 水曜日

また死にたくなかった。昔に戻りたい。お母さんに会いたい。

十一月六日 火曜日

いよいよ、皆ギラギラし始めてる。毎日が受験勉強だから、その上にさらにもう期末試験の勉強とか言ってる人もいる。私はいつも通りの勉強しかしないし、それで問題ないと思う。大抵、そうやって勉強する勉強するって言ってる奴程言って満足するんだよね。バカじゃねって思う。でも、そんなに高校受験に受かりたいと言う気持ちを持つてる事自体は羨ましい。私にはあんまり意味のない事だから。

十一月二十一日 水曜日

(空欄)

十一月二十二日 木曜日

(空欄)

十一月二十三日 金曜日

私が死んだ方がお父さんにとってはいいのかも知れない。
お兄ちゃんに会いたい。

十一月二十四日 土曜日

久しぶりにあのお店に行った。あそこに行くのとあと一週間は生きててもいいかなという感じになる。なおみんに感謝しないと。平谷間さんと伊東夫妻がいた。暗く落ち込んだ顔してたのか、平谷間さんが励ましてくれた。優しい人だと思う。それに、私なんかよりも視野が広い感じ。奥さんは幸せ者だね。私も結婚して、主婦とかやるのが一番性にあってる気がする。帰宅してから、ちーちゃんとメールで話す。晩ご飯、今日は青椒肉絲(また

これが難しい漢字なのでパッケージを見ながら書いてます）にした。多少塩分を減らして作る。美代子さんの料理は父にはしょっぱ過ぎる。私にはちょうどいいけど。

十一月二十八日 水曜日

事件が起こった。テレビで近所が映っているから、何かと思った。殺人事件。殺されたのは子供。犯人はすぐに逮捕されたってテレビで言ってたけど、私の知ってる人だった。平谷さんが犯人。殺された子供は一度だけ会った事のある、あの子。自分の子供を殺したって、テレビで言っていた。はつきりいってあり得ない。あの子はそう言う事する人じゃない。絶対に何かの間違いだ。『神のお告げを受けて』なんて、馬鹿な事言う人じゃない。……いや、そんなに深くあの人の事知ってるわけじゃないから断言は出来ないか。でも、きつとちーちゃんだつて同じ風と言う。俄には信じられない話だ。

今急に頭に浮かんで来たんだけど、お兄ちゃんは弁護士をやつてる。ひよつとしたら何か知ってるかもしれない。ちーちゃんに場所教えてもらつて、明日お兄ちゃんの仕事場に行つて見よう。

十一月二十九日 木曜日

少し書くのが遅くなった。一度寝て、起きてから書いてる。もう昨日だけど、今日と書いておく。今日は、学校から帰るなり、お兄ちゃんの仕事場に行つた。そこにお兄ちゃんはいなかった。女性が一人いて、外出中だつて言つていた。生徒証を見せて妹だと名乗ると、昨日の事件の事で呼ばれてるつて簡単に教えてくれた。その人、確か名前は大屋さんとか言つてたかな。大屋さんの言う事には、いつ戻つて来るか分からないと。仕方ないから、前にお兄ちゃんが町に戻つて来た時に一応住所だけは伯母さんから教えてもらつてたから、一回帰つて、インターネットで場所調べて、直接家に行つた。嫌がらせに父に「今日は泊まつて来るから」と言うメールだけ送つて、その後は携帯の電源を切つた。

そのあと、お兄ちゃんと色々話して、急に泣いてしまつて、恥ずかしかつた。何しに会いに来たのか分からなくなつたけど、お兄ちゃんは前よりちよつぱり大人っぽくなつた。私の料理を食べて美味しいつて言つてくれたし、私が泣きながら無茶な事ばかり言つても絶対に怒らなかつたし、凄く安心出来る時間が過ぎせた。それで、結局ちーちゃんに相談してた件だけど、恋だと思ふ。目が覚めてから、やつぱりこれは恋なんだろうと思つた。お兄ちゃんが私と同じ布団に入れないでもじもじしてる所見て、私の事を女として見てるんだと思つたら急に胸が締め付けられる感じがあつたから、そう言う事なんだと思ふ。嫌

われたくないから、ちよつと距離を置いた方がいいかも。

現在午前六時。もう少しお兄ちゃんの寝顔を見たら、朝ご飯用意してあげよう。

今まで書いた分を、窓からの光で所々読み返して、殆ど毎日書いて来た事に少し誇りを覚える。今年の春の時と今の気持ち、全然違うんだ。体は何ヶ月で生まれ変わるとか、何年で全て細胞が切り替わるとか言うけれど、意識の方も随分入れ替わってるのかも知れない。

これ以上無様な恰好を見せない様に、昇さんが起きる前に顔を洗って着替えを始める。なんで昇さんって呼び方なのかって？ 心情的にそうなんです。お兄ちゃんという呼び方ももうしつくり来ないから。

こういうの、倒錯的な感情って言うんだよね。でも、本当に兄な訳じゃないし。従兄なら結婚出来るって前誰かに聞いた。なら、好きになつたって悪くないはず。昇さんの方が私の事を妹みたいにしか感じてないという事は、分かっていきます。この恋は実る？ うーん、無理じゃないかな、現実的に考えて。でも、自分の気持ちがあわかって少しはすつきりした。またちーちゃんに相談してみよう。あの人は本当に優しい。

冷蔵庫を開けて、昨日の卵の残りを出す。まあ二人分、足りるかな。あとヨーグルトも買ったし、それで朝ご飯をやっつけよう。日記を読んでいる間に、もうすぐ7時になっちゃ

う。そう言えば昇さんはいつも何時に起きてるんだらう。

フライパンを出して、スクランブルエッグを作る。音と匂いで昇さんが起き出した。

「おはよう」

「あ、起きた？ もうちよつと待つてね」

昇さんは寝間着姿のまま、牛乳を注ぎ始めた。あられもない姿で、私には心を許しているのが分かる。まあそれは、家族と言う文法の中の事なのだけど。いつもどんな朝ご飯食べてるのか、こんなもので大丈夫なのかとちよつと心配。でも男の一人暮らしだから、きつとあんまりちゃんとしたもの食べてないと思う。なら大丈夫かな。二枚の皿によそつて、二人分。家でしているのと同じ様に、そうする。

「ごめんね、急に押し掛けて来たりしてさ、昨日。心配しなくても、今日帰るからね、長期滞在とかないから」

そう言いながら席につく。またあの家に一回戻つて、それから学校に行く事を考えると憂鬱になる。しばらくここで暮らしたい。昇さんに迷惑をかけたくはないけど、優しいんだもんね。甘えなくなる。でもだめだよ薫子、そんな事して昇さんに嫌われたら、私の心壊れちゃう。最近自分でも精神的に余裕がないのは分かってるから、これ以上負担をかけるような事は避けなくちゃ。